

II 特別シリーズ II

科学技術
振興機構

『さくらサイエンスプラン』友情と感激

第1回

アジアの優秀な青年を招
へいする科学交流を展開



沖村憲樹氏(国立研究開発法人・科学技術
振興機構(JST)特別顧問、日
本・アジア青少年
サイエンス交流事
業(さくらサイエ
ンスプラン)推進
室長)

さくらサイエンスプラン誕生のいきさつ
日中関係が厳しい状況に立たされ、日中双
方の各種世論調査でも相手国民を嫌うと回答
する人が9割前後にもなるという結果が報道
されたのは、2013年6月ころでした。こ
のような厳しい日中関係を少しでも打破する
ため、JST特別顧問でもある馬朗人先生
のお供をして、下村文部科学大臣に、中国か
ら青少年を招聘したいと陳情にいきました。
大臣からは、対象をアジア諸国に広げるよう
にとのご指示があり、アジア諸国・地域から
青少年を短期で招へいする「さくらサイエ
ンスプラン」(以下SSPという。)が誕生し
ました。

事業の概要

SSPは、サイエンス先進国であるわが国
が、アジア諸国・地域のサイエンス向上に貢
献し、友好を育むことを目的とする青少年交
流事業です。中国、インド等15カ国・地域か
ら、原則初来日の高校生、大学生、研究者等
の40歳以下の青少年を、原則10日間程度、わ
が国の大学等(大学、研究機関、高校、企業
自治体等)に招き、わが国のサイエンスに触
れて貰う計画です。

わが国の受け入れ大学等が、アジア諸国・
地域の送り出し機関となる大学等との間で協

力関係を確立、継続、強化する「草の根活
動」を原則としています。急成長するアジア
諸国・地域との協力拠点が、広く全国に拡大
し、協力活動が活発になることを目指してい
るものです。

昨年から公募したところ、内外に大きな反
響を呼び、多くの応募がありました。学識経
験者からなる「さくらサイエンス委員会(委
員長三木千寿東京都立大学学長)」で厳正審
査して選定しました。

昨年度は、わが国の140大学等が、アジ
アの488の大学等から2945名を招聘、
協力関係を確立し、グローバル化を進めてい
ます。(別表)

企業には、旅費はJSTが負担し、滞在費
等は企業に負担してもらう形で参加を呼びか
け、昨年度14企業が参加し好評でした。

2945人の青少年は、大学等の研究会、
学会、共同研究、研修等に参加、熱心に勉強
し、討議し、涙ながらに別れを惜しんで帰国
していききました。

修了者には、「SSP修了書」を交付し、
「さくらサイエンスクラブ」に入会してもら
い、未永く交流を保つことを目指しています。
高校生特別コースを実施

高校生には、JSTが「高校生特別コー
ス」を企画、招聘しました。アジアの最優秀
な青少年に一流の科学者を目指して貰うこと
を目的とし、理研等最先端の研究施設の視察
ノーベル賞受賞者の講演、一流大学のキャン
パスの視察等最高のプログラムを用意しまし
た。アジアの超難関高校から、各種のサイエ
ンスコンテストで金メダルを獲得した生徒等
最優秀の生徒が参加してくれました。

参加高校生は、日本人の親切さ、真面目さ、
日本の清潔な社会、文化、科学技術力に驚き、
ノーベル賞受賞者等から、研究の厳しさ、決

	人数
中華人民共和国	1,204
インドネシア共和国	254
カンボジア王国	63
シンガポール共和国	44
タイ王国	335
大韓民国	164
台湾	144
フィリピン共和国	109
ブルネイ・ダルサラーム国	5
ベトナム社会主義共和国	245
マレーシア	198
ミャンマー連邦共和国	8
モンゴル国	53
ラオス人民民主共和国	29
合計	2,945

して夢を捨てな
いこと等科学者
のマインドを学
んで帰国してい
きました。最後
の夜、リーダー
の卵達は、国の
隔てなく夜を徹
して語り合い、
感激と友情を分
かち合っていました。
次々と評価し
てくれた外国機

関とメディア

人民日報は、「高校生が、ノーベル賞受賞者の根岸英一先生から多大な啓発を受けた。高校生が、最先端の科学技術に触れ、成熟した日本の科学技術を体感して多くのものを得た。日本人が中国人に友好的であると感じた。中日の将来は、若者の手に懸かっていると。」と、厳しい日中関係下で、政府系メディアが異例の紹介をしてくれました。

中国のみならず、アジア各国の大学等関係者、政府関係者は、本事業を高く評価し、感謝しており、初年度だけで約110件が内外の新聞テレビ等のメディアで紹介されています。

1. アジア諸国・地域の効果

この事業の効果について次のように整理してみました。

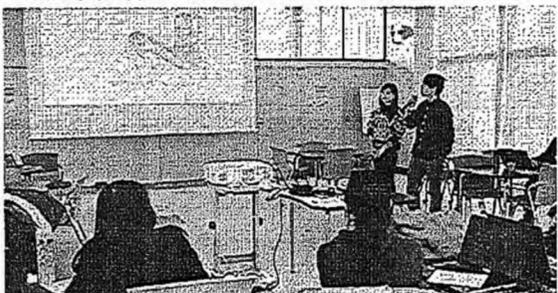
- (1) アジア諸国の科学技術人材の育成に貢献
- (2) アジア諸国とわが国の大学等の組織の交流、人と人の交流が進む。
- (3) これらにより、アジア諸国の科学技術の向上に貢献。

2. わが国にとっての効果

- (1) わが国の貢献に対し、アジア諸国の日本への評価が高まる。
- (2) 親日的なリーダが増える。来日した青少年の殆ど100%が日本を好きになり、再来日を希望している。
- (3) 我が国の受入れ大学等に国際協力拠点が増え、グローバル化を促す。受け入れ大学等は、①英語で対応し、異質の文化を受け入れる。②受け入れ大学等と不断の関係、交流活動が生じる。③人的関係が生じ、各国、各大学等について勉強するようになる。インターネットによる友好関係が広がっている。



白川英樹博士の授業を受ける中国の高校生たち



研修会で発表する招へいされた学生ら(九州工業大学で)



立命館高校でロボットについて意見交換

- (4) 急速に世界レベルに向上しつつあるアジア諸国・地域の大学等との交流は、我が国の大学、科学技術の向上に貢献する。
- (5) 中国始めアジア諸国・地域は派遣留学生が増え、大部分が米国や欧州諸国に行っているが、この事業により優秀な留学生の来日が増加する可能性があり、我が国の人材確保に大きな役割を果たす。

所感

留学は、学生にとって一生を左右する重大な問題です。厳しい歴史認識問題を抱えているアジア諸国・地域では、我が国との交流に感情的な壁があり、歴史と伝統のある憧れの欧米諸国とでは、大きなハンディキャップが存在しています。気軽に来日し、現実を見て貰うことで、このハンディキャップを一挙に埋めることが出来ると実感しています。

SSPを実施してみても判明したことは、10日間程度の短期間交流が、派遣側にとっても受け入れ側にとっても、極めて利用しやすい制度であるとの評価をもらい、反響が大きかったことを感じています。

最後にアジアの諸国・地域は、急成長を続け、将来世界の中心地域になるでしょう。これら諸国・地域の優秀な青少年は、大部分欧米に憧れて留学しており、リーダの日本離れが進んでいます。

SSPは、アジアに貢献すると同時に、アジア諸国・地域のリーダの卵たちの最も多感な青少年の時代に、優れた日本のサイエンス、素晴らしい日本の文化と社会を認識して貰い、日本と日本人に好感を持ったリーダがアジアに溢れることを目指しているのです。SSP事業を通じて、わが国がアジアのイノベーションを担う人材の育成拠点となることを目指して行きます。